法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<若人濶歩>新科学主義の可能性 : 文学とは何か

頭司, 弘子

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
19
(開始ページ / Start Page)
58
(終了ページ / End Page)
68
(発行年 / Year)
1967-12-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019209

若人潤歩

学問には年季を要するかもしれない。しかし、それだけが学問を推進する力であってはなるまい。最も若い会員層はなにを考えているのか。あの若々しい頭脳の中でひらめいていることをなまのままで汲み上げてみるべきではないか。ことし学部を巣立った人々の論壇を開こうとする、わたしたちの企ては、そういう未来形の人々の持つエネルギーへの期待にささえられている。

新科学主義の可能性

——文学とは何か——

頭司弘子

この時代、そしてより多く文学というものにかかわりながら生きている私たちにとって、いつも気にかかるのは、ほかならぬ「文学とは何か」という問題でしょう。なぜなら、多くの思索の歴史にも拘らず、それは現在でも明確に把えられていない問題の一つだからです。先刻までは確かに把えられていた筈のものが、一瞬後には、すでに失われているという経験がたくさんあります。つまり、私たちの生とは、常に新しくその問いを問い続けているものかも知れません。

今までにも、文学に関するさまざまな問いが提起されてきました。中でも、この問いこそは、過去におけるすべての文学作品の数と同じほど問われてきました。従って、作品としてではなく、一般的にそれを取り出して記述することは、多く見当違いなものになってしまい勝ちでしたし、また、なってしまい勝ちです。しかし、例えば現代のような混乱期、文学のそして人間の混乱期においては、そういう作業もあながち無意味とは思われません。なぜなら、明治以後、我が国の多くの文学者たちが、文学を文学としてのあるべき場所に位置づけようと戦ってきたにも拘らず、現代においては、文学も他のあらゆる芸術も、一つの社会現象、青年の頃の過失として片づけられてしまうような状態になっているからです。もちろん、その原因を、文学にかかわり合っている人たちのみに課することはできないでしょう。しかし、その原因の一つに、今までの多くの文学論が文学を他の人間活動とは別個の、ある高邁なものと考えるカント以来の美意識を内包し、超人間的なところに位置づけようとしたこと、それが受け入れられるにつれてその内的進歩が滞りはじめた観のあることなどが考えられないでしょうか。もちろん、その高邁さゆえに文学というものにひきつけられ、その賛美に酔ったまま自らを創造者にまで高めてゆく人たちも少なくありません。しかし、残念なことにそういう幸せな人たちの多くは、文学活動全体がナンセンス化しつつあると一般に印象づけるためにのみ役立つような結果をもたらしています。そうして、神格化された文学とナンセンス化しつつあるそれとの間で苦しみ、挫折してゆくたくさんの人たちのことをも私たちは忘れることができません。

従って、彼らの中から、文学の超人間的地位を放棄し、人間に立

ち帰ろうとする声が聞かれるようになったからといって、それは決して無理なこととは思われません。そうして、実のところ、文学も芸術も、人間をはなれたところにありはしないのです。

私たちは、文学について何かを語ろうとするときに、よく「文学とは、文字で書かれた芸術である」という定義から出発します。[1] しかし、この普遍的な定義も、全体の人間活動の中における芸術活動の正しい位置づけを忘れて論じられるならば、それはほとんどものの役に立ちません。ところが、実際には、多く忘れられ勝ちで、カント以来の美意識をどこかに内包しつつ論議が進められてゆくのを見落すわけにはゆかないのです。

ところで、文学がどれほど複雑な状態にあっても、尚かつ、共通した文学者としての最低限の条件があるとしたら、それは各自が対象としている読者たちの認識の現状を鋭敏に先取することではないでしょうか。そうして、また、先の定義で、もし私たちが芸術活動というものを他の人間活動とのかかわり合いにおいて常に新らしく位置づけようとするならば、当然、その時代的進展を無視することはできない筈です。つまり、いずれにせよ、その時代の人々の人間なり社会なりに対する認識の時代的進展が問題になるわけで、それが現代においてはカントの頃とは比較にならないほど科学的になりつつあることは無視できない筈なのです。例えば、最も幅広く読まれているという週刊雑誌一つにしても、良かれ悪しかれ科学的人間観のもてはやされている事実は見落せません。また、よりアカデミックな分野においても、私たちを取りまくこの社会について、また、私たち自身についての科学的把握の進歩は無視できない状況を呈しているのです。

つまり、諸科学がそれぞれ発展しているばかりではなく、まさにそれゆえに、お互いの間に横たわっていた溝をのりこえ、人間科学として各分野の科学的成果を総合し、そのことによって全体としての学問研究をより効果的に推進しようとする動向が世界各国でみられるのです。[2・3・4] そうして、人間の認識獲得の中心でギリシャ哲学が歴史的に果たしてきたような役割を、いずれはそれが肩代りしてゆくであろうという夢も托されているのです。つまり、こうなっては、リチャーズの言葉通り、人間に関する観念的な操作をいくらつみ重ねてみても問題は少しも進展しないでしょうし、私たちはもう一度最初から、出発する必要があるといえるでしょう。[5]

もちろん、現在ではまだそうした独自の科学は確立されていません。しかし、そういう総合的認識を目ざして現在までの科学的成果をまとめた科学書ならば、多くは個人的な労作ですが身のまわりに見出すことができます。つまり、それらは、いわば科学的ロマンチシズムによって総合された人間観といえるでしょう。ところで、一般に人々は、科学ほどロマンチシズムから遠いものはないと思い勝ちです。しかし、個々の実験例などを記述することはともかく、特に、それらを総合しようとする場合には、かなり高度のロマンチシズム——事実に基きながら想像によってそれらを組み立ててゆくということ——が必要とされているのです。例えば、マルキシズムなどはその典型といえるでしょう。しかし、多くの場合それらは、マルキシズムのように人間と社会とに不可分にかかわったものではなく、また実験可能なものが多いために、或はその結果によって次々に正否が明確化されてゆくので、科学全体としてはロマンチシズムの少ないものという印象を与えているのかも知れません。ところ

が、この人間に関する総合という現代科学のロマンチシズムは、非常に高い芸術性さえ備えているように思われます。

さて、過去においてもそうであったように、科学者たちがその成果を総合しようとする場合にはいつも、多少の差はあれ、彼がそれまでに受けてきた社会的歴史的人間観が、文学者の場合と同様、よほど厳しく排除しない限り流れ込んでしまうものです。もちろん、そこに疑うことのできない個々の科学的事実のあることが文学者の場合と違うわけで、それだけにまたより高い信頼を持つともいえます。そうして、どんなロマンチシズムもそれに続く実証が常にそれを修正してゆくので、ますます正確さが蓄積され、そういう意味で現代の人間科学というロマンチシズムも、当然、その未来の発展が予測されているのです。

ところで、独自の人間科学はまだ確立されていないといっても、生物学や人類学や生理学などの自然科学はかなりの成果をあげていますし、社会科学や人文科学なども存在しています。しかし、これらの科学は動物と共通した部分の人間研究が主であるか、または側面的、或はトータリズム的というところから脱しきれてはいないようです。[7] だからこそ、部分的、側面的、トータリズム的ではない個人としての人間をも全体として把握するような科学の確立が要求されており、となれば、それが文学独自の分野とプロレタリア文学論争以来考えられてきたものに、極めて接近するものであることは疑えません。

しかし、その分野には心理学というものが存在している筈ですし、事実、心理学を中心とした人間科学論もみられます。また、それだけに心理学とかかわり合った文学の少なくなかったことは周知の通りです。けれども、よく知られているように、それは本来心の学問として、人間の意識上のものを主な研究対象としてきたために内省的、観念的な傾向が強く、それが科学であるかどうかについても、科学者たちの間でさえ今だに論議が絶えません。また、「万人の万人に対する闘争」とヴィゴッキーをして嘆かせたような心理学内部の小流派の対立は、心理学そのものの危機さえ生み出しており、従ってそれを無整理に取り入れることは、文学について考える際にも問題を無限に混乱させる惧れがあります。[9]

もちろん、フロイトにはじまる精神分析学が、人間を動かす真の動因は意識下にあるとして、科学的、客観的分析を主張しているのは確かです。しかし、その結果現在では汎性欲説はかなりの修正を必要とされ、アドラーとユングが各々の派を作り、近年では新精神分析派と称するフロムらの研究があるなど多くの流派にわかれ、さまざまに主張の差があり、とてもそれを一つの科学として確実に把えることのむずかしさは否定できません。[8] それに比べれば、行動主義心理学が方法論的に、人間科学確立のための重要な役割を演ずるものという考えの方が納得できるようです。

ところで、各科学を公平に総合しようとする人間科学論がありますが、それらはまだ分散的で具体的な個々の問いに答えてくれるものではありません。そこで、生命体としての人間の統制的機能を営んでいる神経系に関する知見を骨子として総合を試みるロマンチシズムが、現在では最も重要なものと思われますので、それを中心にこの論議を展開してゆくことにします。

1

まず、人間の生存活動の全貌というものを大ざっぱにでも把握しておく必要があると思います。そうして、そのためには、進化論的、遺伝学的、人類学的な視点からみた、いわば人間の素材ともいうべきものについて確認しておかなければなりません。もちろん、それらの個々のものについてふれる必要はないでしょうから、ここではその一つであり、そうした個々のものを外的なものと、或は内的なもの同志とを結びつけている統制系について確認しておきたいと思います。

人間の体は内分泌系も含めた神経系によって統制されています。つまり、神経網を信号が通過するという極めて素朴な現象が私たちの生存活動を成り立たせているのです。しかも、呼吸運動のような周期的発信を除くすべての信号通過は、受容器で受けとめられる内外環境の諸変化や血液の性状変化を刺激として発信し、伝わってゆき、その信号はシナップス整理されながら筋肉や内臓に送られ、それらに反応を起すという〈刺激→反応〉即ち広義の〈反射〉が神経系機能の中心です。[2・12・13] そうして、この原則は私たちの意識面での現象、例えば思考や意志や感情の生起にも当てはまりますし、創造活動にしてもこうした因果関係のそとにあるとは考えられていません。かりに、脳の中に何かがひとりでに湧きでるように内省された経験があるとしても、それはその刺激となったものが意識（言語）化されなかったためと考えるべきなのです。

さて、この信号の通過する路、つまり反射弓には無条件反射と条件反射との二種類あって、無条件反射を形成する刺激と反応が土台となって条件反射を形成し、それが形成されると両反射の区別は不明確になり、また、ある反射は他の反射を制止するという具合に複雑な結合ができます。つまり、私たちの生とは多種多様に結合したこの二つの反射が、内外環境に反応しながら、常にダイナミックに運動しているものと考えることができます。もちろん、そうしていながら、常に新らしい反射をつけ加えていることでもあります。

ところで、この無条件反射は、私たちの生を直接的に保証しているものであり、また、その種属の間ではだいたい共通しており、私たちの体が生きている以上存在し続けているものです。そうして、条件反射というものも、結局は、無条件反射の生起を変形するものに過ぎません。しかし、ここでいう無条件反射は、一般に本能として知られているもののほかに、例えば連帯反射とか模倣反射とか探求反射というようなもの、さらに多くの未知のものを含んでいるといわれます。[2] 従って、例えば、ゾラの頃に問題とされたような科学的人間観とは質的に多大な差が生じているといえます。その上、現実の個々の人間の場合には、この素材と過去との相関によって形成された彼の実存が、常にそれらをひきつれながら新らしい反応へと導いているわけですから、どんな時にも、素材そのものとして存在しているのではありません。ただ、素材そのものが消えることは、死を除いては決してあり得ないというだけのことです。

さて、この次元で人間について考えるとき、忘れることのできない問題がもう一つあります。それは、ある生命体が内外環境の諸変化を刺激として受容する際に、その生命体がその時点で生存上必要なものを基準として受けとめているということです。[2・15] 例えば、ある物理的な温度変化も、生命体にとってはそうした量的な差として受容されるのではなく、一方は冷く他方は暖かいというように、全く質的に異る温度変化として受容されるのです。この場合、受容器そ

のものが違いますし、それによって起る反射も反対になります。つまり、生命体にはそれが生存するためのそれぞれの条件があって、その生存条件が内外環境の変化を受けとめる場合の、質的、量的な尺度になっているということです。換言すれば、どんな自然的物理的現象も私たちにとって純粋に客観的なもののままにとどまっているのではなく、私たちはいつも、生存体としての人間というフィルターを通して何かを受容し、処理しているということです。

従って、人間以外のものを対象とする科学的記述が、もし自らを目的として人間的なものから切りはなして論じられるならば、それらは人間のためのもの、人間の認識を高める価値あるものとなり得ないばかりか、正しく科学学的であるともいえないでしょう。人間に関する科学が進歩し、その科学自体にこのような観点が加わっている以上、私たちはかつて人間不在といわれたような科学を修正しなければなりませんし、私たち自身の科学観をも改めて考え直す必要があるのではないでしょうか。以上、動物と共通した機能が人間の生存活動の不可欠な土台であることを確認した上で、特殊人間的な問題にふれてゆくことにします。

2

文学の定義を極めて大ざっぱに「書くことと読むことの中にある」としても、異議のある人は少ないでしょう。となれば、それがどちらも言語にかかわる行為であることは明白です。しかし、私たちにとって言語とは一体何でしょう。文学的創造者、または詩人たちにとってのみ、それは複雑でかつ有意義なものなのでしょうか。この章で私は人間の生存活動と言語との関係について考えてみたいと思います。

ところで、文学の中で扱われている言語観を、次の二つに大別することが可能です。つまり、ある人たちは言語はコミュニケーションのための手段、道具であり、コミュニケートする内容はまた別にあると考えます。また、別の人たちは、言語を一種の素材として考え、その素材に無限の配慮と忍耐とをもって手を加えるのが作家であると考えます。彼らにとって書くとは、特殊な空間として了解された言語そのものを探究する企て以外ではありません。

同様な対立が、人類史的な言語発生の時期について語られる場合にもみられます。つまり、ある人は、人間が言語を持ったのはコミュニケーションのためであるといい、別の人は、いや自己表出のためだというのです。[1] しかし、このように対立している考え方も、実は言語の持つ性格の一面づつを把えているに過ぎないわけで、不必要な対立の行われる原因の一つに、その基礎にある神経機能と言語との関係の考察が不足している点を指摘することができるでしょう。つまり、人間が言語を持ったのは、コミュニケーションのためとか自己表出のためとかいうのではなく、言語を持った結果それらが可能になったのだと考えた方がずっと事実に近いのです。また、言語を道具であるとみなす人も、素材であるとみなす人も、共に、言語が記号であるということを忘れているようです。記号としての言語については、サルトルが次のように述べています。「言語は、書かれるかそれとも口頭で伝えられるある対象(もの)から成っていて、それは、物的に現存している現象の対象であるが、しかもその場所にはないかそれともその場にあっても見られはしなかった別の対象(もの)、すなわち意味されるものを目標にするような対象であり、またこの

意味されるものは記号を通して認識されるべく他の個々人に委ねられているものである」と。こうした、記号としての言語を介して作者と読者とはその間にはじめて文字を成り立たせているのですが、皿語というものは書物だけではありません。また、その書物も文学だけではありません。従って、これだけは文学について何かを語ったことにはなりません。

では、その記号としての言語は私たちの生存活動とどのようにかかわり合うものなのでしょうか。それが記号である以上、そこには必ず何らかの対応する事象があるのですが、その事象とは、つまり内外環境が私たちの神経系内にひき起した変化以外ではないのです。その変化が汎化され分化されながら、言語化されてゆくのです。そこではじめて意識が生じるわけです。もちろん、人間は生まれた直後から言語化やありとあらゆる言語にかかわった世界に生きているのではありません。赤ん坊は喃音の中から必要な音を組み合わせ、主に大人を模倣することによって言語を習得してゆきます。また、喃音の中から日本語の発音だけを取り出して組み合わせてゆくのが日本人に育てられている赤ん坊であるというように、言語はある同一集団内ではある程度共通の約束の成立しているものです。もちろん、それは決して固定されたものではなく、また、時間的空間的に無限に変化する事象のすべてを記号化しきれているわけでもありません。その中のどれが選び出されて記号化されたのか、また、なぜそのような発音が使われたのかというようなことは、その人間集団の歴史的社会的状況によって決まり、変動します。しかし、どんな時代のどんな社会においても、それが人間による営みである以上、常に、人間というフィルターを通して事象を把握していること、また、生存上必要性の高いものを中心に記号化しているであろうことなどは十分推測できることです。つまり、どんな表現であれ、言語は多かれ少なかれ表現者自身を表現していると同時に、人間一般をも表現していることになるわけです。

そうして、言語は対応する事象の条件刺激として人体に作用するために、第二信号系と呼ばれているのはよく知られていることです。ハヤカワによれば「人間は言語を持つことによって巨大な神経共同体を得た」[17]ということになります。従って、私たちが言語について考えるとき、そのはじめからある伝達性を無視することは、文学の場合といえどもおよそ無意味なことになります。例えば、絶望や孤独の文学といわれるもの、他との連帯を故意に断ち切ろうとするものなどがあるわけですが、彼がもしそういいながらなおも書いているとしたら、無意識にしろそれは連帯性のある生命活動に参加していることになります。このようにして、人間が自己の体内外に起った神経系の変化を言語化し、伝達することによってその生存力を高めた事情はよく知られていることでしょう。

ところで、言語をもつことによって人間が得たものはそれだけではありません。つまり、人間の神経系内に新しい機能〈思考〉が加えられました。この言語的思考によって人間はより先の、より正確な見通しをたて、内外環境に順応し働きかける力を得たのです。そうして、この思考活動、または認識活動は実践活動との相関において発展するという弁証法が成り立ちます。つまり、言語は地図であり、それを現地と比較検討することによってより正確な地図となり得るのです。そうして、ちょうどどんな地図でも正確な地図でなければ地図としての役割を果たし得ないように、私たちの言語もでき

2・9・17

るだけ正確に事象を反映する必要があります。正確に反映された言語でなければ、私たちが生きてゆくための、よりよく生きてゆくための役には立たないからです。

しかし、無限に変化するものを有限な言語で記号化してゆく以上不完全な言語化はさけられません。従ってその場合には神経系はそれらを受容しているのに、またそれなりの反応も起っているのに言語化されないという状態が起ります。もちろん、私たちはいつも手持ちの言語で片づけようとする傾向がありますし、またハヤカワのいう「前記号的言語」だとか、「何にでも使える便利なコトバ」などというものも生み出しており、さらに後になって次第に言語化されてゆくという場合もあるでしょう。また感情とか情緒としてまとめられている言語も、その明確に言語化されにくいものの一つです。

ところで、現在もそうですが、過去の文学観の多くに、人間のより人間的なものは心とか感情であるとして、それを言語で表現するものが文学であるという考え方がありました。そうして、現在の科学はそれらがどのような神経機序であるかをかなり明確に説明しています。つまり、それらは、起るべき反射の起り得ない状態、反射阻止の状態にある現象を言語化したものであるというのです。[2.18] 従って、それらはいわば人類進歩を導く警報のようなものです。しかしそれをそのまま肯定して文学観としてしまうと、まるで反射阻止、欲求不満こそ人間的、文学的価値であるというような印象をあたえます。もちろん、人間にとって価値あるものとは、そのようなところにとどまっていることではありません。むしろ反対に、人間のより人間的な反射を最小限にしか無駄にしない社会の実現を指向することにこそ価値があるのです。また、言語、知識、思考などというものは、人間の反射をより効果的に、より人間的に遂行させるためのものであり、またそのように発展してゆくものです。そうして、地図そのものが阻止要因となっていることの多い現状に慣れてしまうと、人間にとっての言語の、この本当の役割を見失ってしまいます。もし先の文学観が、それらを見失わず感情や情緒を借りてそれを描き続けようというのであれば、それらを表現することによってその現象をもたらした阻止要因を除去してゆこうという姿勢が明確につけ加えられていなければなりません。しかし、よしそれがつけ加えられたところで、姿勢というような曖昧な概念に頼っていたのでは、現代における課題として「文学とは何か」という問いに答えたことにはなりませんし、また、どんな時代にも通用するような文学観ともなり得ません。そこで、次章ではそれを考えてみたいと思います。

3

前述のように、人間のあらゆる活動が言語と強く結びついたものである以上、言語と深くかかわっているというだけでは文学を説明したことにはなりません。それどころか、文学が言語とかかわったものであるということは、即ち、それが人間の認識活動の中以外にはあり得ないということを物語っています。しかし、すべての人間が認識活動を行なっているのですし、また行なってきたのです。あらゆる分野で認識活動が行なわれていますし、また行なわれてきたのです。つまり、私たち人間の歴史とは、認識活動の歴史、地図をより正確に普遍的なものにするための歴史にほかなりません。生存力を高め、より人間的に生きようとするこの逞しい生存体として

の人間の姿は、それらがより多く意識下のものであるだけに疑えません。また、真実のものを求めようとするこの人間の知的好奇心、探究反射は、確かに、人間の持つ限りなく愛すべきものの一つです。[2] さて、それではその歴史のなかで、文学はどのような役割をもち、どのような形でそこに参加するのでしょうか。そこで、言語についての更に詳しい検討が必要になります。

言語とは事象の記号ですが、事象は無限に変化しており、従って固有名詞でもない限り、それはある特性で共通したものをまとめ、分類して記号化したものといえます。つまり、程度の差こそあれ、言語はすべて抽象性をもっていることになり、また、この共通する特性の幅がせまくなるほどその分類は大分類となりより抽象的になってゆく傾向があります。[17]

ところで、事象を分類し、それについて反映されたものをまとめて記載するということは科学の持つ基本的な性格です。となれば、言語は本来科学性をもつものと考えることができるでしょう。つまり、科学とは内外の事象を反映し、分類し、それらを支配する法則をみつけて未知の事象を予測し、それらに対処するものです。そういう意味では、どんな動物の神経系にも科学性の基礎は存在していることになりますが、そこに言語が介入することによって人間は真の科学性を身につけたものといえます。[2] そうして、この人間の認識活動の中の科学性を吟味し、より純粋なものにしたのがいわゆる〈科学〉となるのです。つまり、人間はこの科学性を強く身につけることによって他の動物をしのぐ生存力を得たわけですが、そのためにそれは個人のものとしてとどまるのではなく、たくさんの人々の生存に役立てるために、誰にとっても同じように受けとめられるよう、言語の約束を厳密にして普遍的なものとするための工夫が必要になります。そうして、普遍性が進めば進むほど、その科学は高い発展段階にあり、逆は低い発展段階にあるといえます。ところで、科学として低い発展段階にあるということは、換言すれば人間の認識活動の中の言語が言語として低い発展段階にあることにほかなりません。つまり、言語は常により高度な科学を目ざして進むわけで、言語の持つこの傾向をこの論文では言語の科学性と呼ぶことにします。もちろん、この場合の科学はある時点での科学的成果そのものを指しているのではありません。いってみれば完全な地図ということで、それを実現するために言語の進む方向を、科学性と名づけてみたのです。

次に、この科学性とは反対の方向にある言語の性質について考えることができます。前述したように、言語はたくさんの未開拓部分を持っていました。事象のすべてを記号化していないのがその一つであり、そこを間に合わせの言語で言語化するとか、分類によって実際は違うものを同一化してしまうというようなこと、また、言語は記号化についてのお互いの約束があってはじめて存在するわけですが、この約束は決して厳密に行なわれるのではなく、主にお互いに模倣しあうことによって行なわれるので、その模倣の不完全さがそのまま言語の意味の不完全さにつながるということ、さらに、言語は第二信号系として働くために、過去の体験と結びついて無限に複雑な条件反射性の反応をそれぞれの人体に引き起すなどがあげられるでしょう。[2・5・15] このような言語の未開拓部分、言語の幅の広さ、約束の不完全さ、それを受けとめる人によって違ってくる反応というものは、まさに言語の科学性とは反対の側にあるものと考えられま

す。そこで、それを言語の文学性と呼んでみましょう。しかし、こう呼んだからといって文学が人間の認識活動の進展を妨害するものだというのではありません。それどころか、文学はまさにこの文学性によってのみ人間の認識活動の歴史に参加し得るのですし、また文学性は〈文学〉となってはじめて人間の歴史を前進させるものとなりうるのです。ただし、これからの論議は主に創造者の認識活動を対象として行なわれます。勿論、創造者としての読者も批評者も含まれるものです。

ところで、私たちの受容器が受けとめている事象の多くが言語化されないとしても、それらは神経系に伝えられており、神経過程が生起し、それなりの反応が起っている筈です。言語化された神経過程だけをとって心とか思考とか意識などと定義づけるならば、それらは意識下と呼ばれるのでしょうが、いわゆる感性的認識というものは、このような神経過程が内省的な世界にある種の波紋を及ぼしたものと考えることができます。それが先導者となって言語化の過程が進められ、認識が確立されるわけです。

そうして、それが人間の認識活動の歴史を進展させようとする創造者のものであるならば、人類にとってはじめての、或は未だ言語による約束の成立していないものであることは明白です。従って、それは極めて個性的なものであり、また他人に伝達できないところにその特徴があるといえるでしょう。しかし、それがそこにとどまってしまうならば、人間の歴史は前進不可能です。また、人間はそれをあらゆる可能性に頼って言語化し、表現しようとします。例えば、それが文字以外の芸術、音とか色とか形とかによって表現するのであれば、それほど無理とは思われません。ところが、文学はそれを言語で表現するのです。しかも、約束の成立していない言語を生み出してしまうのではなく、程度の差こそあれ既存の言語によりかかりながら言語化するのですから、そこにはどうしても科学性からはなれた言語の使い方が問題にならざるを得ません。つまり、前述の言語の文学性がここではじめて重要な意味を持ってくるのです。そうして、このような言語の使い方においてすぐれたものを、すぐれた〈文学〉ということができます。

勿論、ここでいう言語とは、一つの単語から、節、文章、物語り、さらに文学のあらゆるジャンルまで含んでおりますから、それぞれについての問題がすべて同じというわけにはゆきません。例えば、作者が物語り全体を介して何らかの感性的認識を伝えようとする場合には、個々の単語の文学性を駆使するよりもそれを伝達するためにどれほど適当な物語りを構成するかの方が問題になることもあるでしょう。また、詩であれ散文であれ、それを伝達するために最適と思われた表現を探るべきで、文学のジャンルというもの自体、決して固定されたものではないことはいうまでもないでしょう。一見すると、丹念に手を加えてより完全な言語化を前進させるものが散文であるようにみえますが、丹念に手を加えるという点では詩人といえども別のものではありません。そうして、いずれの場合にもその手の加え方は必ずしも言語を科学性に向かわせるというのではなく、むしろ文学性を更に駆使してその体験をより完全に再現させるわけです。言語のひびきとか匂いというようなものを意識的に駆使するのも、いわば言語の条件刺激としての効果を利用してそれを完成させようとするものでしょう。

しかし、文学が言語の文学性を駆使するものというだけのことで

あれば、表現は違ってもすでに多く指摘されていることです。が、そのようにして開拓された認識が、常に言語の科学性による認識に向って流れるという、この人間全体の認識活動の存在、その出発点を作るものこそ文学であるという基本的な視点をも、忘れることはできないと思うのです。

4

今まで述べてきたような〈科学〉と〈文学〉との関係は、例えばフロイディズムとかマルキシズムとかいう特定の科学をその基礎にすえるべきだというのではありません。ただ、人間の認識活動のその時点での到達点を知りその方向を把えておくためには、その時点までの科学的成果を身につけておく必要があるという科学についての一般的な態度を指示しているに過ぎません。しかし、〈科学〉と〈文学〉とのこの理想的かつ本質的な関係を実現するためには、我が国近代の歴史は、まさに惨澹たるものといわねばならないのです。科学の移入をめぐる我が国近代化の歴史を分析することは非常に興味深い問題ですし、また得るところも多いと思えますので、ここでその概略にふれてみることにします。

ヨーロッパ諸国においては、ギリシャ時代にみられるように、人間の認識が科学に向う傾向はかなり順調に進行していたようですが、キリスト教という強力な反科学が長期間人々の心に根深く滲透していたことが、その素直な発展を内的にも外的にも抑える結果になったようです。つまり、それが人間の科学性を尖鋭化し〈科学〉として独立宣言させる原因をも作り出したといえます。しかし、科学に対立するものは宗教ではあっても文学ではありませんでしたから、あるときは両者が手をたずさえて民衆の力を鼓舞したようなものであったことは周知の通りです。

ところで、明治以後我が国に流れ込んできた科学は、ヨーロッパでそのように独立宣言をし純化されたものであったために、或いはまた官僚制と結びついた移入でもあったためにどんな人間の中にでもある科学性の発展したものとしてそれを受けとめることはほとんどなかったようです。[7] 従って、日本近代文学史上に現れる科学はかなり唐突で、また特殊な移入物として扱われることの多かった点は見逃せません。また、科学がはじめて人間と社会との本質的なところで文学と接触したといわれるマルキシズムに対しても、文学主義か科学主義かというような二者択一の形でしか問題が把えられず、文学はあくまでも科学に対して基本的に受け身に終始しています。[2] 従って、我が国においてはヨーロッパ諸国でキリスト教が果たしていた反科学の役割を、文学が受け持っているような印象を与えています。文学主義は科学が進歩すると感覚的にふれられる日常的現実の中に文学独自の分野を求めてさまよいますし、科学主義はそれを人間の科学性の発展したものとして受け入れるほど科学に対して能動的ではなかったために、それはほとんど宗教に近いものになってしまい勝ちでした。[7]

しかし、こういう文学史や思想史に現れた科学に対する態度は、必ずしも時間的空間的に日本人の全体の認識活動を代表しているものではありません。無思想の思想ともいえるそうした人々の日常の生活とその認識活動の中に、実は最も素直にそれらが棲息しているのかも知れません。[21] なぜなら、精神的雑居性の指摘されるこの国の人々の認識活動には、文学を反科学と考えるようなピントの狂った

思考が一時的にひろがってはいるものの、キリスト教というような強力な反科学が存在していなかっただけに人間の科学性と文学性とが、見事に雑居している可能性があるからです。しかし、あくまでも可能性にすぎません。ただ、その可能性を正しく伸ばし得た認識活動のみがこの論文で述べてきたような創造者としての認識活動となり得るであろうことは疑うところではありません。

最後に、文学をこのようなものとして位置づけるならば文学作品の価値というものはその対象となる人間の認識活動の時間的空間的変貌につれて変動するものと考えられます。時間的な側面からいえば、創造者も含めたその人間集団の到達している認識水準を基準としてある程度客観点に決められるでしょうし、その一つの指標としてその時点での科学的成果を比較することができるでしょう。例えば、人間が必ずしも意識上の動因によって行動するものではないということを主題として表現した作品は、フロイト以前には高い価値を持ち得ても、現在ではそれだけでは低い価値しか持ち得ません。また、空間的な側面からいえば、その作品がいかなる読者層の認識活動を対象としているかによって、価値は広くもせまくもなるでしょう。そうして、いずれにしても、人間の認識活動の流れの出発点としてその作品の果たした役割の評価が基準となるべきであろうと思われます。また、いずれの場合にも、その創造者がその人間集団内で生存上現在いかなる認識獲得が必要であるかという、その核心をつかんでいるかどうかはさらに重要なものといえるでしょう。

ところで、リチャーズは、〈相対性の時代〉〈生物学の時代〉の次には、いずれは「多くの人々の心が自身の本性を認識するところから開ける」第三の時代の到来を予言しています。

つまり、ここに文学の一つの大きな仕事があるということでしょうか。

参考文献

1 「言語にとって美とは何か」 吉本隆明
2 「脳と現代」 千葉康則
3 「人間—この未知なるもの」 カレル
4 「人間科学シムポジウム」 学術会議
5 「文芸批評の原理」 リチャーズ
6 「科学的人間の形成」 八杉竜一
7 「日本の思想」 丸山真男
8 「心理学史」 今田恵
9 「思考と言語」 ヴィゴッキー
10 「行動科学入門」 ベレルソンら
11 「人間科学入門」 ソル・タックスら
12 「脳生理学の基礎」 コーガン
13 「パブロフ学説入門」 ヴァツーロ
14 「条件反射学」 パブロフ
15 「反映の理論」 キセリンチェフ
16 「文学は何ができるか」 サルトルら
17 「思考と行動における言語」 ハヤカワ
18 「感情の世界」 島崎敏樹
19 「日本の近代文学」 近代文学館編
20 「現代日本文学論争史」中 平野謙ら編
21 「民俗の思想」解説 益田勝実

（昭和四二年学部卒業）